

週末は東京積雪のため空の便の欠航が続き大混乱だったが、学会参加のためセントレアからシーズンオフの寒い岐阜県に行ってきた。岐阜大学産科婦人科主管の第9回日本がん・生殖医療学会。2011年に研究会として立ち上がって以来、小児・AYA (Adolescent and Young Adult) 世代のがんサバイバーシップを社会に発信してきたが、昨年の第8回から学術集会として小児科、産婦人科などの診療に携わる医師、看護師、胚培養士、臨床心理士など多職種にわたる熱い会となつて

AYA世代のがんサバイバー

情報広報部副部長 藤井 美穂

AYA世代とは、15〜39歳に相当する思春期・若年成人を指し、将来の夢に向かつて心身ともに成長する、人生の基盤となる時期である。このAYA世代にがんの告知を受け、治療に挑まなければならない、本人と家族に対する精神的な支援が必要になるが、同時に生殖年齢にも当たることは避けて通れない。がん治療とともに生殖医療の技術を駆使し、やがて子どもを持ち新しい家族を作るというありふれた当たり前の夢をかなえる努力が医療者に求められている。

わが国のがんの死亡数、罹患数は人口の高齢化を主な要因として増加し続けているが、高齢化の影響を除いた年齢調整率で見ると、死亡率は1990年代半ばをピークに減少、罹患率は1980年代以降増加している。男性の胃、肺、大腸、前立腺、肝臓がん、女性の乳房、大腸、胃、肺、子宮がんのいわゆる成人系がん種と異なり、AYA世代のがんは白血病、卵巣がんや精巣がんなどの胚細胞腫瘍や乳がん、子宮がんであり、生殖に関わる臓器の固形がんが含まれる。分子標的薬などの開発があり、がん治療が進歩するにつれ、乳がんの平均5年生存率は93%、精巣がんのそれも80%に達するが、さらにゲノム医療の進歩も加わり予後は大幅に伸長す

いる。本原稿を書いているとき、スマホの速報音がなった。水泳の池江璃花子さんが白血病で、オーストラリアでの合宿から急遽帰国したというのだ。2016年、中学3年頃から水泳界の星として知られるようになり、昨年のアジア大会では6冠を達成、数々の日本記録を保持するアスリートの代表である。輝くような笑顔と健康体が印象的な彼女らしく、白血病の治療後にまた水泳に復帰するという意志表明をツイッターで語っている。

ると予測される。がんサバイバーへの対策が施策として必須になってくる。全国どこでも同じレベルの医療が受けられる環境を整備するために2006年に制定されたがん対策基本法は、2016年にがん患者が安心して暮らすことのできる社会への環境整備を盛り込んだ改正法が成立した。さらに第3期がん対策推進基本計画には、小児・AYA世代のがん対策が明記されている。岐阜で参加したがん・生殖医療学会では、AYA世代のがんサバイバーが子どもを持ちたいという当たり前の希望に対して、医療技術のみならず助成金交付を自治体に求める運動を推進していく講演もあった。全国22都府県ではがん生殖医療ネットワークを立ち上げ、先駆的に取り組む滋賀、岐阜、埼玉、広島県、京都府の5府県が、がんサバイバーが生殖医療を受ける際には自治体として助成金を出している。

今回の学会参加は、アメリカの神学者ライオンホルド・ニーバーによる祈りの一節「神よ、変えることのできないものを静穏に受け入れる力を与えてください。変えられないものを変える勇気を、そして、変えられないものと変えるべきものを区別する賢さを与えてください。」を医療に反映していく医療者の責任を考える機会となった。